広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	英語初級学習者に対するコミュニケーションにおける適切性の指導 ： 『気持ちを伝える』働きに焦点をあてて
Author(s)	又野, 陽子
Citation	深澤清治先生退職記念英語教育学研究 ： 192 - 199
Issue Date	2020-03
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053653
Right	この論文は出版社版ではありません。引用の際には出版社版をご確認、ご利用ください。 This is not the published version. Please cite only the published version.
Relation	

英語初級学習者に対するコミュニケーションにおける適切性の指導
―「気持ちを伝える」働きに焦点をあてて―

又野　陽子

1．　はじめに

適切性はコミュニケーション能力を構成する重要な要素の一つと考えられる。Campbell and Wales (1970) や Hymes (1972) は，文法規則についての知識と状況に応じて適切に言語を使用することに関する知識と言った２つの概念でコミュニケーション能力を説明している。これに基づいてコミュニケーション能力についての詳細なモデルが Canale (1983) や Bachman and Palmer (1996) によって提案されたが，両モデルとも文法・語彙上の正確さに関する構造能力と言語使用の適切性に関する語用論能力といった２つの基本的な要素に分けられる（Niezgoda and Röver, 2001）。伝統的な英語教育においては，教授や評価の際に構造能力を中心ととらえてきたが，その後のコミュニケーション重視の英語教育の動きにおいては，実際のコミュニケーションを目的として適切に英語を運用することができる力の重要性が認識されるようになった。これまで中間言語語用論能力に関する研究の多くは，母語話者と第二言語学習者との言語使用を比較した異文化対照語用論研究であったことが Kasper (1992) や Kasper and Schmidt (1996) によって観察されている。近年は Bardovi-Harlig (1999), Rose (2000)，Kasper and Rose (2001) など，中間言語語用論研究を第二言語習得研究の枠組の中でとらえようという試みが見られるようになったが，語用論能力の初期の発達のパターンを明らかにするような入門期の学習者を含む研究は非常に少ないとされている（Kasper and Schmidt, 1996）。

筆者は，博士論文 [1] において，英語の初級学習者を研究対象に含め，英語の機能連鎖にみる適切性の習得プロセスを調査したが，中学生に実際に授業を行う際にも，適切な言語使用という視点を持って指導を行ってきた。文法・語彙に関する指導、また「やり取り」・「即興性」を意識した言語活動を組み込む際も，それらの指導と重層的に話者の人間関係や状況を踏まえた適切性という視点を持って指導を行うことは言語の運用という観点から非常に大切な作業であると考える。しかしながら，中学校段階における語用論教育の位置づけに関しては，その実践に難しさを感じたり，文法・語彙の指導に時間を要してその必要性が十分認識されていなかったりといった理由から，中学校現場では吟味されることが多くはないように見受けられる。そこで，本稿においては，教科書を使用した日頃の授業を行う中でも，教師が少し意識することにより，中学生に対して発話の適切性についての気づきを促したり理解を深めたりすることにつなげることができることを報告することとする。

２．授業実践[2)]

２．１　教材

NEW HORIZON English Course 2（東京書籍）において，生徒がアメリカでホームステイをしたときの困った事とその解決策とが扱われる教材（Unit 4 Homestay in the United States）がある。本文は，ステイ中の困りごと（食事の分量が多すぎること）や苦情（ホストファミリーがどこにも連れて行ってくれない）を書いて相談する生徒のノートの文面とそれに対するサマースクールの先生の助言から成っている。また，助言を受けて，自分の意思を適切に述べたり，相手のよい点を見つけたりすることの大切さに気づく場面が引き続き紹介されている。コミュニケーションの大切さと難しさについて４つの Part で扱われているが，本時においては，食事の分量が多すぎる場合や嫌いな食べ物が出された場合に適切に気持ちを伝えることの大切さとその方略（Part 3）を扱った。

２．２　教材文の口頭導入と内容理解

教材文の口頭導入に際しては，教師と生徒の間でインタラクションを図りながら，教材文の内容を再構築していった。絵や写真も効果的に使用しながら，キーワードや新出語句を導入し，キーワードや新出語句（資料１中の下線部）は，教師のモデルに続いてすぐにリピートさせていった。

資料１．オーラル・インタラクションの例

T: Let's look at this picture.　Who's this?

S: It's Saki.

T: Right.　It's <u>Saki</u>.　She's doing <u>a homestay in the United States</u> during summer vacation.　Her <u>host mother</u>, <u>Mrs. Wilson</u>, is <u>kind</u> to Saki.　Now, look at this.　What can you see on the table?

S: <u>Meat</u>./<u>Mashed potatoes.</u>/<u>Salad.</u>

T: Yes.　The meal looks <u>delicious</u>, but Saki doesn't look happy.　Why?

S: She doesn't like salad./She doesn't know how to eat it./She doesn't know how to use a knife and fork./She's not hungry./She's full./It's too much food for her./She has a stomachache.

T: Very good.　Actually, Mrs. Wilson always gives Saki <u>too much food</u>.（量が多いことを示すジェスチャー）　What should Saki do?　Does she have to eat everything, or can she tell her?

S: She has to eat everything./She can tell her.（挙手により生徒の意見を確認）

T: OK.　Let's find out on page 58.

口頭導入後，教師の読みで音とテキストを一致させ，ホストマザーに伝えるべきであるというサマースクールの先生の助言を読み取らせた。発言はクウォテーションマークに囲まれていることを伝え，ホストマザーに言うべきせりふを見つけて下線を引くリーディングタスクを与えて黙読させた。

２．３　板書

読み取った適切な伝え方を板書により確認した。量が多すぎる場合に加えて，嫌いな食べ物を出された場合の気持ちの伝え方も整理した（資料２）。

資料２．板書レイアウト

適切に気持ちを伝える

・I'm sorry.　The food **tastes** delicious, but I can't eat that much.

謝る→ほめる・感謝する→できないことを伝える

・I'm sorry, but I don't like tomatoes.

・It **looks** delicious, but I can't eat spicy food.　I'm sorry.

各発話をその言語機能ごとに，____，.....，_____とアンダーラインの種類を変えることにより，発話の順序や各発話の働きが生徒にとって視覚的にわかりやすいように工夫した。（アンダーラインの色を変えることにより提示，整理する方法もある。）　話者の伝えたい意図は_____の部分であるのだが、その前後に「謝る」「ほめる」「感謝する」といった「気持ちを伝える」働きの発話が使用されていることが確認できるものである。（I'm sorry. を最初に置く場合とともに，最後に置く場合も例として示した。）生徒も各自のノートに線やペンの色を変えてわかりやすく板書を整理していた。

「ほめて感謝しようと思っても，嫌いな食べ物は食べられないから delicious かどうかわからないのではないですか」という質問が生徒から出された。その発言をとらえ，「少しでも食べることができた場合は味がわかるから tastes delicious，食べること自体ができない場合は looks delicious と見た感じをほめることができる」ことを伝え，動詞 taste と look の意味を改めて確認する機会とすることができた（この時点で未習ではあるが、smells delicious と動詞 smell を使用することも可能である）。

“Saki could tell her host mother politely that she doesn't eat so much.　Polite communication is important.”と丁寧に気持ちを伝えることの大切さを伝え、学習のまとめとした。

２．４　コミュニケーションにおける適切性に関する生徒の学び

筆者は、毎時間振り返りシートにより生徒に自己評価をさせており，その時間に学んだこと（Learning Outcome）を自分のことばでまとめる時間をとっている。

資料３．本時における生徒の学び（Learning Outcome）

【発話の順序・補修方略】

・言いにくいことを伝える文の構成がわかった。順序良く気持ちを伝えることが大事だとわかった。

・会話の流れをしっかりと理解することができた。順序をふんで話す。

・「謝る→ほめる・感謝→できないと伝える」順番大切 Important!

・いきなり自分の言いたいことを伝えるのではなく，前や後ろに I'm sorry. を入れたり，ほめたり感謝をすることが大事だとわかった。

・断るときは前置きをして断ると感じがよいことがわかった。

・最初に謝るパターンだけでなく，ほめた後で最後にも謝るととても恐縮した感じになるとわかった。

【相手意識】

・相手の気持ちを考えて，謝ったり前置きをしていったらより良く伝わるとわかった。

・丁寧に心を込めた言い方をするときちんと相手に伝わってコミュニケーションができるとわかった。

・言い方が丁寧になってよいと思った。相手への敬意は大切だと思った。

・言いにくいことでも＿＿の部分だけでなく，ほめる・感謝する部分や I'm sorry. を言うことで，自分も言いやすくなるし，相手も少し嫌な気分になりにくくていいなと思った。

・相手に上手に自分の気持ちを伝えることは大切だと思った。

【日本語との対照】

・言いにくいときは日本語と同じで前置きなどがいることを知った。

・日本語も英語も似ているのだなと思った。

・日本語でも英語でも言葉の順序が大切。

【今後のコミュニケーションへの意欲】

・言いにくいことも怖がらずに謝ったり感謝の気持ちを伝えたりするとしっかり伝わることがわかったので実践したい。

・外国の方と話すときに今日習ったことを生かして話せるといいなと思った。

・ほめるのは言いにくいことを伝える以外にも使えると思った。このような英語を使えるようにしたい。

生徒が記入した本時の Learning Outcome のコメントを内容によって４つのカテゴリー（発話の順序・補修方略，相手意識，日本語との対照，今後のコミュニケーションへの意欲に関するもの）に分けて整理したものが資料３である。

同じ状況で日本語で伝える場面も想起させながら，中学生にわかりやすい表現や板書を工夫することにより，英語初級学習者である中学２年生であっても上記のような気づきを持ち，適切な言語使用によりコミュニケーションを図っていきたいという意欲を育むことができたことがうかがえる。

同様の場面での日本語における方略も振り返りながら本時の学びを記している生徒もいたが，インタラクションの知識の多くは L1 から転移されるものも多いとされている（Cook, 1991 参照）。日本語の転移を効果的に用いることも，語用論的意識の涵養に有益であると思われる。

３．評価

資料３に記されたような気づきが実際に運用に結びついていくことを見るために、例えば生徒同士の「やり取り」の場面での発話の中身や対話の始め方等を語用論的な視点から評価したり、定期テスト等においても場面を提示して、「気持ちを伝える」ために生徒が使用した方略を評価することも行っている。授業で取り組んできたことが反映され、「授業とリンクする」（卯城編著，2012，p.96）テスト内容にすることにより、授業とテストがつながっているという感覚を生徒が持つことができ、生徒のより積極的な授業参加にもつながるのではないかと思われる。

ともすれば文法・語彙の習得の程度を図るテストになりがちであるが、生徒の語用論能力の評価を文法能力の評価と関連づけて総合的なコミュニケーション能力の把握に向けたステップを積み上げていくことも必要なことであると考えている。

４．おわりに

本稿においては，日々の授業の中でコミュニケーションに対する適切性を視野に入れた指導を中学生の段階から意識して行うことを事例として報告した。「自分だったらどうするか（What would you do?）」「日本語だったらどう伝えるか（What would you say in Japanese?）」など，生徒の日常と結びつけた問いを考えさせることにより、課題（適切なコミュニケーション）をより身近に感じ、しっかりと考えることができたように見受けられた。I’m sorry. It … but I can’t …. といった文法的にはシンプルで生徒にとってそれほど難しくない表現を適切な順序で重ねて使用することにより，相手意識をもった適切なコミュニケーションを図る一つの方略となることを学び取っていた。学習の初期の段階から，一文ごとの提示，練習にとどまらず，発話の紡ぎ方や順序も視野に入れて，談話レベルで適切な発話を促して

いくような授業を組み立てていきたいものである。

注

1) 2007 年に出版（Fujiwara (2007)）。

2) 教材文の口頭導入や板書の仕方，振り返りシートの具体，英語で行う英語の授業づくりに関しては又野（2017）（語学教育研究所より外国語教育研究賞奨励賞受賞）を参照。

参考文献

Bachman, L., & Palmer, A. (1996). *Language testing in practice: Designing and developing useful language tests.* Oxford: Oxford University Press.

Bardovi-Harlig, K. (1999). Exploring the interlanguage of interlanguage pragmatics: A research agenda for acquisitional pragmatics. *Language Learning*, *49*, 677-713.

Campbell, R., & Wales, R. (1970). The study of language acquisition. In J. Lyons (Ed.), *New horizons in linguistics* (pp. 242-260). Harmondsworth: Penguin.

Canale, M. (1983). From communicative competence to language pedagogy. In J. Richards & R. Schmidt (Eds.), *Language and communication* (pp.2-27). London: Longman.

Cook, V. (1991). *Second language learning and language teaching*. Longman: Edward Arnold.

Fujiwara, Y. (2007). *A study on the acquisition of English function-chains: A Focus on Japanese EFL learners.* Hiroshima: Keisuisha.

Hymes, D. (1972). On communicative competence. In J. Pride & J. Holmes (Eds.), *Sociolinguistics: Selected readings* (pp. 269-293). Harmondsworth: Penguin.

Niezgoda, K., & Röver, C. (2001). Pragmatic and grammatical awareness: A function of the learning environment? In K. Rose & G. Kasper (Eds.), *Pragmatics in language teaching* (pp.63-79). Cambridge: Cambridge University Press.

Kasper, G. (1992). Pragmatic transfer. *Second Language Research*, *8*, 203-231.

Kasper, G., & Schmidt, R. (1996). Developmental issues in interlanguage pragmatics. *Studies in Second Language Acquisition*, *18*, 149-169.

Kasper, G., & Rose, K. (2001). Pragmatics in language teaching. In K. Rose & G. Kasper (Eds.), *Pragmatics in language teaching* (pp.1-12). Cambridge: Cambridge University Press.

Rose, K. (2000). An exploratory cross-sectional study of interlanguage pragmatic development.

Studies in Second Language acquisition, *22*, 27-67.

卯城祐司. (2012). 英語リーディングテストの考え方と作り方　株式会社研究社

笠島準一・関典明他. *NEW HORIZON English Course 2*　東京書籍株式会社

又野陽子. (2010). 言語の使用場面と言語の働きを重視した英語の授業に必要な視点　英語教育学研究創刊号, pp. 37-44.

又野陽子. (2017). 中学校英語サポート BOOKS　はじめてのオールイングリッシュ授業―今日から使える基本フレーズ＆活動アイデア―　明治図書出版株式会社

文部科学省. (2018). 中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　外国語編　開隆堂出版株式会社

付記

本稿は，平成 30 年 11 月 24 日、第 25 回山口大学英語教育研究会における口頭発表の内容に基づいている。